【津別】町内の道路案内看板や施設名を記した看板類をもっと見やすくしようと、若者たちが立ち上がった。津別高生に加え、北大や北大公共政策大学院の学生らでつくるサークル「HALCC（ハルク）」がワークショップを2日間にわたって津別高などで開催。町民も参加し、新たな看板の見やすさや印象の強さに知恵を出し合った。

看板見やすく 若者が知恵

津別高生×北大生ら学生サークル

活発に意見を出し合った「看板デザインワークショップ」

津別高とハルクが続ける高大連携事業の一環。佐藤多一町長が昨年、「町内の看板を今よりもっと見やすく、そして統一感あるデザインにできないか」と同校へ依頼したのがきっかけになった。

昨年9月には同校生徒とハルクのメンバーが町内を徒歩や自転車で回るフィールドワークを実施。町の看板を調べてリスト化したほか、視認性やデザインなども細かくチェックした。

それらの調査結果を基に、現在の課題や新しい看板デザインのヒントとなる言葉や考え方をよく話し合い、方向性を導き出す「町内看板デザインワークショップ」を3月18、19日に実施した。

課題やデザイン 町民と検討 今夏完成へ

18日は同校で開き、学生らのほか、津別に帰省中の若者や地元のお年寄りら計約30人が参加。4～6人の6グループに分かれて意見を出し合い「設置場所はどうする」「字体も重要」「夜間もちゃんと見えるか」など、模造紙に一つずつ言葉を書きだした。

参加した町豊永の佐藤忠夫さん(78)は「若い人の声を聞くと、自分が思ってもいない考え方を持っているんだな、と気づくことが多い」と感想を話した。

ハルク代表の松田涼花(すずか)さん(23)＝北大公共政策大学院公共経営コース＝は「率直な話し合いができて良かった。大まかな方向性は出たと思う」といい、看板数点を具体的にデザイン化する作業に入る見込み。町の第三セクターである北海道つべつまちづくり会社に看板制作を依頼し、今夏ごろ完成させ、佐藤町長へ渡す予定だ。

（青山秀行）